

## 研究ノート：

# ちいさな両手と2つのハコ

北 岡 一 道

(2007年1月30日受理)

### 1. はじめに

子供たちが、テレビをみる。メディアは、メッセージをつたえるだけでなく、その視聴者（や読者）の感じかたにまで影響を及ぼすとマクルーハンはいった。カギっ子は、家族関係からも解放され、テレビやマンガなど、ごくみちかなメディアにふれる時間が（より）おおくなりがちであろう。本稿では、カギっ子に関連して、家族関係とテレビメディアがつくる環境のことを、すこしく素描するかたちで考えてみよう。

### 2. タテ社会と家

日本の近代（・現代）社会のおおきな特徴の1つは〈個人主義〉である、とされる。これは、ヨーロッパにおいて、中世から近代にかけて、社会契約説の思想的成立とともに、現実の社会に浸透していった。日本も、江戸期から明治にかけての社会変革によって、〈近代化〉を達成し、〈個人主義〉が日本社会に（じょじょに？）広がってきた、とみるのである。

これにたいし、日本社会には〈個人主義〉はまだ（十分には）成立していない、あるいは、日本社会には、〈個人主義〉と対立的な独自の様相がある、というみかたがある。後者の代表の1人が中根千枝氏である。（川島武宜、丸山真男氏らの封建的な家族関係という啓蒙的な議論は前者の例であろう。）

中根氏の主張は、（思想というより、社会学の具体的な文脈で語られ）、〈タテ社会〉論としてしられ、日本の社会は、西欧社会とは基本的にちがいがい〈タテ社会〉をなしている、というものであ

る。このタテ社会という社会（特徴）は、ちいさな単位である〈家族〉から、学校や団体などよりおおきな社会単位、あるいはそれ以上の集団にまでみられる、とする。（中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係』講談社現代新書、1979『適応の条件』講談社、ほか。以下、ほぼ中根氏にしたがう。）

日本は、100年以上まえに近代社会を達成し、ある意味で、西欧的な生産体系をつくりあげ、そういった西欧的な社会制度の導入に成功した国とみられている。しかし、欧米とちがいで、タテ社会として、年功序列や終身雇用が（現在崩れつつあるといわれるが）会社組織のおおきな特徴となっている。

年功序列的なしくみなどが、日本の他の部分社会のいたるところにみられ、「政治家ほか、特殊な部分社会」でも、その基本的な骨格となり、そのしくみの上に派閥ができあがっている。また、タテ社会は、資格や契約などのように言語的なものでなく、ひとに依存し、権威主義、温情主義の性格をもつことになる。（資格や契約などというものが、重要な日本の中の部分社会、あるいは、それに関わる言語操作にとくに馴染んだひとというものは、ありうる。たとえば、西欧の合理主義の影響をとくに受けた研究団体のひとびとや、外来の契約宗教を信仰するひとびとはそれにあたるだろう。）

日本の組織では、タテ関係が、横並びのヨコ関係よりはるかに強い。（それは、封建的、因襲的というわけでないが。）日常的に使用せざるをえない日本語でも、上司は名前で呼ばずに〈課長〉、〈部長〉などと役職でよび、そうよばれた〈課長〉、〈部長〉さんは部下を〈山田くん〉、〈佐

藤さん>と名前を呼ぶ特権がある。さらに敬語は、文法化し（日本語の膠着性の付加部分として）いわば<必然的な強制の系列>をつくっている。（外人さんは、敬語の意味・言語構造は理解できるが、自分から使用する場合、つよく抵抗を感じるひとがおおい。酷似した敬語組織と儒教文化をもつ韓国人などをのぞいて。）

日本社会の特徴を中根氏はまず、<タテ>の組織ととらえたのであるが、この組織の性格として同時に、<権威>、<温情>、<場>、<縁>といったものがでる。異なる文脈において（土居健郎氏）、<甘え>ということが、日本社会の性格としてとりあげられることがある。この<甘え>は、タテ社会における<温情（主義）>を別の側面からみたものと解釈できる。タテ関係において、シタのものが<温情>を求めることが<甘え>であり、<甘え>を許す（与える？）ウエのものが<権威>にあたる。

産業や外的な制度を中心に近代化を達成し、いま、ひとびとは近代的な個人主義によって生活していると思いがちである。しかし、実際は、日本の社会は、家庭から、学校、会社、その他の部分社会においても、タテ社会の性格をつよく保持している。それぞれの部分社会はタテのしくみを中身とし、ウチ・ソトの区別によるカラでつつまれているが、社会全体としては単一な様相を示している、ということである。

こうしたタテの組織構成を中心とする日本的な社会を、中根氏は軟体動物（棘皮動物??）に見立てている。こうした種類の生物には、そこを打てばしとめられるという急所がない。したがって、ピンポイントの攻撃による打撃は受けにくく、組織の再生力がたかい。たとえば、トップが実際に全戦略をになう場合は、そのトップが打撃を受けると、その組織全体にとって致命的である。しかし、トップが戦略をになう割合がひくい場合は（オミコシ）単に、トップ（あるいは他の箇所でも）の打撃によって組織が壊滅することはない。

中根氏にしたがうと、近代的な（現代的な）日本社会は個人主義であるという通俗的理解はあまり（不適切）であることになる。広域的な法制度などが（十分に）西欧的であっても、実際の、

生活単位である部分社会、とくに家族は、個人主義に相對するタテ社会として、なりたっている。この生活の単位は、同時に経済や政治、社会生活一般の単位でもある。ところが、欧米では、この家族においても個人主義が成立し、むしろ、育まれている。個人主義を優位にした表現をすると、日本人には、個人主義の資質がない、ということになる。タテ社会をたんに<集団主義>としてよいかどうかは別に、そこには、<個人主義的な>個人というものは、存在しない。

西欧社会思想のおおきな起源は、ローマ法とキリスト教である。西欧法の出発点とされる紀元前のローマ法は、個人主義（的自然法、私有権）の尊重に特色がある。（中世法、教会法が一時、台頭するが、近代になって、ローマ法の精神は再生され、近代諸国家の法体系の基礎となっている。）教会法自体は、ローマ法と対立的に語られるが、キリスト教は典型的な契約宗教である。キリスト教的理解においては、個人が唯一絶対神と<契約>して宗教が成立する。（ひとは、1人の人間として、1人（？）の神様と<契約>することが、すなわち宗教である、という考えかた。）これも、また個人主義であり、自助の思想がいきわたっている。

日本人の社会意識の成立の根拠について、中根氏は、日本独自の社会意識、あるいは、<場>を強調する集団認識のありかたは日本的な<家>の概念によっている、とする。<個人>は家族からつくられる。個人には、氏・素性という生まれながらの社会関係による特質が一方にある。また、資格、学歴、職業、地位、資本関係、などあとになって個人が獲得したものがある。また老若・男女の別など、<広い意味の資格>などもある。しかし、これらのなかで、家族内では、老若・男女が基本的な人間関係をつくる。

家族のなかでは、目下は、（基本的に）目上に、<おにいちゃん>、<おかあさん>と<立場>でよびかける。目下、目上は相対的な関係である。目上は目下に<花子ちゃん>、<ノビ太くん>と個人の名を、じかにつかんで、よびかける。（よびかけの呼称が、ややくずれているご家庭もあるし、地方もある。）したがって、たとえば妹の

花子ちゃんからみると、目のまえにいる男の子は〈おにいちゃん〉であって〈ノビ太くん〉ではない。また〈息子よ〉というのは文学的表現であって、日用のいいかたではない。

英語圏での呼称習慣はかならずしも一様ではないが、基本的に兄弟の上下間における、互いの呼称の差はなく、じかの名前のみが存在する。名前の俗称はあるとしても。当然、日本における呼称の接辞表現としての敬語相当（あるいは〈反敬語〉とでもよべるもの）はない。したがって、子供からみたとき、父母のみが〈立場〉でよびかけられ（祖父母の同居はすくない）、子供たちは、だれからも、一貫して自分の個人名でよばれ、上下にかかわらず、相手となる兄弟（姉妹）を、一貫してその個人名のみで、よびかけつづける。この家庭で、お互いの立場によって変わることもなく個人が成立しやすいのは理解しやすい。

この家族は、また物理的な家、住居つまり、ハコに（帰宅後、半日ていどは？）入っている。住居という環境には、たとえば個人をしきる壁や木製のドアがある。あるいは、壁がなく、あかり障子だったり、ふすま障子だったりする。これらの環境要素は個人が、どれだけ安定して空間を確保できるか、ということに関わる。

タタミに敷いた花子ちゃんの布団は、お客さんがくれば、今日はとなりのタタミの部屋に移動することになるかもしれない。ちいさな子供布団なら、ちいさな花子ちゃんでも、自分で運んでいくかもしれない。ベッドの場合は、定位置からの移動は、すこし抵抗がある。ベッドは、自分の城で、そこからろげ落ちると、ケガをするかもしれない。布団はタタミと地続きで、また隣りの布団とも地続きになっている。

個人のもつ空間、個人の空間の移動、個人と他人との空間のしきり――といったことが、このような住環境によって表現されている。これらが、子供のころの習慣として成立し、そのひとの主義信条の基礎ともなっていくのであろう。

### 3. テレビメディアと居間

メディア（技術的側面というより）としてのテレビを考えると、主に活版印刷からから、テレ

ビまでのメディアを詳細にとりあげたマクルーハン（1911-80、ハーバート・マーシャル、敬称略）が、今日もお参考にされることがおおい。

『ゲーテンベルクの銀河系』を発表し、印刷メディアとその後の見通しを与えた当時は、（1962、日本語訳68）メディア論が熟した研究領域になっておらず、〈メディア論という一般領域〉を期待する一般読者も、それを評価できる他の専門家もいなかった。そのため、（マクルーハン自身のバックグラウンドが機械工学と英文学であるように、）その知見が十分理解されることはなかった、という。そして、たんに新奇な言説を弄する批評家とみられた。『メディアを理解する』（64）では、用語・文体について「そのシンタックスは理解がむつかしい」といわれた。

形の上の本業はカナダの大学教師であり英文学者であるが、テレビに関するマクルーハンの主張が一般の興味をひくところとなり、メディア論者、文明批評家などといわれたりする。（死因にも関係して〈テレビの見過ぎ〉と揶揄されたりするが、本人は「自分は活字型の人間」という。）一部にはすでにクラシックな研究者であるが、現在、各種電子メディアの変革が進行するなか、一部では先見的なメディア論者として、再検討される機会がさらにふえている。マクルーハンは蘇りつつあるとしてよいだろう。

マクルーハンのテレビ論は、テレビ自体が（公的なメディアとしては）そのメディアの幼年期にあらわれた。ブラウン管とニブコー円板などを技術的な核とするテレビメディア技術の応用はやがて60年代になって広く普及していく。当時、テレビが最先端のメディアであり、テレビメディアに関する一般の議論の成熟もまだみられず（感情的な発言は別にして）、制度的な研究のしくみも当然、成立していなかった。そのなかで、『ゲーテンベルクの銀河系』とそれに続くメディア論の作品群が発表されていった。そのなかで、ひとつの方向として、視聴覚メディア（群）が国家をこえて地球の諸コミュニティをむすびつけていくだろう、と示唆された。（現実可能性についての反対論、情報管理の実際的問題を指摘するむきもおおい。）そのメディア論によれば、まず（1）〈メディウ

ム>：人間の（身体機能の）延長と考えるあらゆるものを<メディウム>（原意は<間にあるもの=媒介物>）とする。家、道、自動車、兵器など、そして一般のマスメディアもふくむ。(2) <メディア>：一般にいわれるメディア、とくにマスメディアは、人間の感覚器官（みる、きくなど）の延長としてとらえられる。（<メディウム>の英語、ないし原語ラテン語の複数がメディア。）後者がマクルーハンのメディア論の（現実の著作群の）中心として理解されている。(2) のメディアが3つにわけられた。(ア) 口承文化における音声言語、(イ) 文字文化における視覚言語、(ウ) 当時としてはテレビを最大特徴とするメディア。（<全感覚的>というが、また、メディアの下位分類の必要を主張する議論もある。）

このような意味のメディア（群）が、人間の各種感覚機能の延長となって、1個の人間から、それに結びついて、延びひろがっていく。（タコや千手観音のようなすがたか？）あるいは、他の個人の<延長の終端>が、その人間のところに届く。こうして、その個人の、あるいは、同様にある集団のメディア環境が形成されていく。

メディアは、目にみえる（電気のコードのように）形であろうが、目にみえない（電波のように）形であろうが、人間の機能を拡大していく。（拡張、延長と訳されるもの用語extensionは、建物の電話の<内線>のことで、コードのイメージにあたる。）とくに、感覚器官の拡張とは、とおくまでみえる目、とおくまで聞こえる耳をもつようなものだ。人間の側から、メディアの種類、あるいは採用・不採用を選択することにもなる。その物理的なメディアの採用とは、自己の延長を意味し、不採用とは自己の切断を意味する。

個人側にとって、メディアたる耳や目が、個人から延びひろがり、この惑星をとりまくとき、惑星が<グローバル・ビレッジ>にむかう、だろうとマクルーハンは考え、同時に、（メディアとそのコンテンツは（あるていど）わけて考えられるが、）メディア（の種類）自体にメッセージ性がある、とした。

マクルーハンは、（テレビは実際は視覚、聴覚の2つの感覚経路を利用したもののだが、）テレビ

を活字メディアの狭い感覚経験から、開放され、<全感覚的な理解>に通じるものとした。（活字メディアを視覚領域に限定するのは、印刷物を黙読する受容者を、メディアの感覚経路の典型としているのだろう。）テレビが普及してからあとは、おおくのコミュニケーションの技術が、テレビを前提としたものによって変わった。

テレビが、視覚、聴覚の2つの感覚経路を利用しているが、（<活字>といわず）言語の場合も、やはり同じ2つの感覚経路を利用している。テレビと言語とは、相互排他的でなく、相互交差している。マクルーハンは一方で、メディアの本質や予言的言説をかたり、あるべきテレビ像の提示につとめたが、もう一方で、具体的なメディア事象の例の分析をおこなった。

文字メディア、印刷物メディア、ラジオメディア、テレビメディアなど各種のメディアの差について、1つ大切なことは、そのメディアタイプが、ものごとを認識するしかたに影響をあたえる、という議論である。（認識のしかたの差はそれを基礎に表現のしかたの差にも通じていくだろう。）かんたんには、感性のありかたが、メディア（のタイプ差）の影響でちがったものになるということである。（ウオーフの言語相対論に類似的。ウオーフは個々の言語ごとに、言語による認識が（あるていど言語構造に影響を受け）ことなるという。マクルーハンは（おおざっぱに）交差することになる。）

歴史的に主要なメディアは（おもに）技術上の理由で、変遷してきた。文字の無い時代は、重要な情報あるいは言語テキストは、それをそらんじる係りの人間（カタリベ）がいた。いわば本の代わりを人間がする。ここでは、印刷物も、メモの文字もないので、記憶力が重要になる。この口承文化にあっては、言語はまず音であり聴覚領域が圧倒的である。文字が一般化し識字文化に移行すると、記憶力はそれほど重要でなくなる。（記録、筆記のしにくい条件はありうる。学校のテストもあるが。）ここでは、言語は筆記され、読まれ、代わって視覚領域が頻用される。このように使用される感覚領域のちがいで、テレビを<クール>なメディア、ラジオを<ホット>なメディアと、

マクルーハンはやんだ。(メディアの下位分類の要求と同様、この区分の基準の修正意見もある。)

テレビやラジオは家庭にあって、ひとびとにちかしく、それらのメディアに触れつづけることが、心理的にも経済的にも負担にならない。一部のひとは、帰宅すると、〈とりあえず〉テレビをつけたり、ラジオをつけたりする。メディアを〈視聴する〉というより、むしろメディアを〈つけて〉いる、あるいは、〈流している〉。こうした状態をマクルーハンは〈メディアはマッサージ〉(として機能している)と評したが、そのメディアとは(当時は)まずテレビのことであった。(マクルーハン自身が〈文字人間〉というなら、みぢかなご家族に〈テレビっ子〉がおられたのか。)

マクルーハンは『機械の花嫁』という隠喩的な作品を書いた。そのなかで、テレビが備え付けられた家に、生まれ育ち、この家に監禁されて生活する人間のありさまを、想像している。この人間は毎日の食料が機械によってあたえられるのである。これは、動物園のオリで生れ育った動物に似ているし、(主観的には)長い休暇や週末を家でテレビをみてすごすひとにも、すこし似ている。外部の社会生活からしばらく離れ、〈無償〉のテレビをみてすごすのである。家に帰ってきた主婦や、カギっ子は、居間でお菓子などたべながら(?) テレビを視聴あるいは流すことはおいだろう。あるひとたちは〈家というハコ〉のなかに入り込んで、〈絵の映るハコ〉をながめ入るのである。その動く絵や音は、地球をめぐる世界のすがたといわれて。

#### 4. カギっ子と2つのハコ

日本でテレビが一般の家庭に普及しつつあったころ、〈カギっ子〉が増加してきた。それ以前は両親の共稼ぎの家庭がすくなく、あるいは、祖父母との同居もおおかったので、カギっ子というものは、すくなかった。だから、カギっ子が問題化する以前、カギっ子どうしの友達がすくないときのほうが、カギっ子はさみしい思いをしたらしい。カギっ子どうしで、両親のいない時間帯がかさなる(かさなりやすい)ので、一緒に遊べたりする。やがて都市部で、カギっ子が多数うまれてくる。

両親が都会型の労働形態で、共稼ぎとなり、祖父母など(他の係累)の同居もない場合、子供は自分の家のカギをもたされる。子供は学校から家にかえり、自分でカギをあけ、家で、母親のかえりをまつ。兄弟も少なく、1人っ子的場合、ずっと1人、家でまつことになる。親がこうした賃金労働者として、やとわれない場合、たとえば、自作農家(戦後日本でふつう)や自営業の家(店舗と住宅が一緒)などでは、カギっ子は基本的にあらわれない。親の労働形態がカギっ子をうみだす条件になっている。

両親以外の同居のないところは、ふつう核家族といわれる。(母子のみを単位として核家族ということもある。)核家族の共稼ぎ、あるいは欠損家族(〈欠損〉という用語自体が、家族のあるべき〈規範意識〉をおしつけているが。)の親の勤務は、子供の一時的な放置の問題をうむ。子供たちは、だれも(まつ)ひとのいない家にかえっていくのである。こうして核家族、カギっ子の第1世代がひろがっていった。(たまに5歳くらいからのカギっ子という例があるが、おおくは10代、小学校からである。)

また子供が巻き込まれる事件もおおく、カギっ子は(親、子供本人の気持ちもふくめ)不安な要素がある。アメリカでは、一般の治安にも問題があり、法律で11歳以下の子供を(親が)放置することは禁じられており、(法律は順守されているらしく?)基本的にその年齢のカギっ子はいない、という。このため、デイケアの施設がよく準備されているし、あるいは、余裕があれば、ベビーシッターをやとう。(アメリカでは、一般の治安には不安があるとしても、ベビーシッターという他人を家に招きいれて、子供をまかすことは、習慣として抵抗がない。)

〈カギっ子〉という言葉は、〈子〉というので〈小学生〉(=学童)を年齢範囲とすることがおおいようだ。子供がカギを首にぶらさげたまま小学校にやってくるというすがたがイメージされているのだろう。〈小学生〉とすると6歳から12歳で、先の〈アメリカに11歳以下のカギっ子はいない〉という年齢とほぼダブる。(言葉の適用の問題もあるが)日本には、カギっ子が(たくさ

ん) いて、アメリカでは(原則的に)カギっ子はいない、ということになる。実際には、子供はカギっ子としての生活が中学、高校でもつづくことがおおい。同様なパターンが大学生(もう子供とはいいいにくい)でも、親は働ける年齢であり、働かねばならないときがある。

典型的な場合を例にとろう。都会では共稼ぎがふえ、人口が密集する団地では、カギっ子もおおくめだったことだろう。(団地から持ち家へ、子供の進学のため、両親が働くなどの理由が親にはある。)カギっ子たちが団地の公園で夕方まであそび、家のドアのカギを自分1人であけ、家で電気(明り)とテレビをつける。(あるいは、早い時代には、各家庭にテレビがなく、団地のどこかの家でテレビをみせてもらいにいく。)テレビメディアの幼年期、60年代のテレビである。

子供むけの番組、マンガを実写にしたもの、アニメ化したもの、夕方の大人むけの番組などがならぶ。子供たちはアニメや実写のヒーローやストーリーを求めてチャンネルをまわした。はじめてみたテレビ番組、強い印象のあった番組は、子供のときの思い出として記憶にのこる。(本当の体験ではないけれど。)中学高校生でも、クラブや通学の負担のすくない場合は、同じように夕方早く、親のいない家にかえってくる。映画館に行くのも、漫画も子供のお小遣いにはちょっと苦しいが、テレビは家族のようにそこにいて、魔法の鏡のようにあこがれるものをみせてくれる。

テレビアニメは、もとマンガ本をもとにしたものがおおかった。(今もそうだが、現在はアニメ単独、あるいはアニメからのマンガ本化もある。)かつてはテレビマンガといわれ、圧倒的な週刊あるいは単行本の流通を基礎として、アニメ化されていった。週刊誌(実際はマンガ本)の、あるマンガ作品がテレビ化されると、子供たちの間で重大ニュースとなった。主題歌も子供たちの共通の<教養>になった。

<魔法使いのサリーちゃん>は、弟と2人、親とはなれてくらしており、カギっ子のお友達だ。(〈ハイジ〉にいたっては、崩壊家庭、経済的不便をもものともせず明るくいきている。)でも、<まるこちゃん>や<サザエさん>ちのワカメちゃ

んも、ノビ太くんも、カギっ子ではなく、カギっ子にとっては、あこがれの家庭だ。(せまい団地でなく立派な持ち家らしい。深刻な家庭問題もなさそうだ。)

テレビは、家族のメンバーのように、カギっ子を家でまわっていて、むかえてくれる。(戸口まできてくれないが。)よしあしは別として、<テレビに子守をさせる>といういいかたがあるが、逆にいうと、たしかにテレビは子守を引きうけている。ある意味で親の役割を引きうけてくれている。

そこの世界の話しを聞かせて、とチャンネルをひねると、子供に<世の中の話しをしてくれる>。外部の情報を伝えるのは(父親1人が働いているのが常態とすると)父親の<仕事>であり、父親の代わりをしている。なにか、お話しを聞かせてねと、子供がテレビをつける。テレビは<絵をみせながらお話ししてくれる>。(面白いお話しに当たるかどうかはわからないが。)絵本を読む(読み聞かせ)のがお母さんの仕事なら、それも引きうけてくれている。

カギっ子にとっては、とくに、家族のように家でまわっていて、いろいろなお話しをしてくれ、世界のことさえ教えてくれるテレビは、ある意味で両親にとって代わるものになる。とくに、情報的には両親をこえる家族の一員になる。(なおかつ、彼はどんなときでも、お話しに要求に応じ、決してしかったりしない。)<テレビさんが教えてくれるので、私は、父さんより世界をしっているし、両親の間違いを指摘することさえできる。>と子供が考えても不思議でない。

また、子供が学童保育のことより、家でテレビをみていたことをおぼえていたりする。実際の人間関係、とくに友達より、場合によっては、テレビの思い出のほうが、(内容によるが)強いこともある。あるときは、テレビが友達だったりする。

この時代の家庭にはいった変化として、テレビとラーメンの登場をあげるなら、機能でいうと、テレビは<外部情報の提供>、ラーメンは<食事の支度>とでもいえるだろう。カギっ子たちはとくに、(カギっ子でなくても)両方の世話になる。テレビが、父親の役割とすると、ラーメンはお母さんの役割(それ以前の家族内の典型的な分担を

前提とすると)ということになる。

さきほど、典型的な状況として、都会の団地の公園であそんでいるカギっ子を考えた。カギっ子の家は団地だけでなく、自宅、一戸建て、棟続き(テラスハウス)などといろんな場合があるだろう。こうした家屋あるいは居宅は家族をいれるハコである。ハコのなかにはまた部屋という小仕切りがあり、家族のメンバーはそのなかに納まっている。

本棚やストーブなどとならんで、テレビはけっこうおおきい家具あるいは道具である。テレビは、おおくの場合家族のあつまる居間においてある(初期はとくに居間に。そして小型テレビができ、1人1台に移行しかけたが、最近、大型液晶化のため、テレビはまた居間の共有空間にもどってきた)ハコである。家は家族みんなが納まるハコであり、テレビは家族がながめるハコになっている。

## 5. む す び

カギっ子が、カギをあけ、家にはいって、テレビをつける。テレビメディアの幼年期とそれからしばらくは(ゲーム機はなく)、それが、ひとつの典型的なすごしかただったであろう。(現在もなお、(しばらくは?)各種電子メディアの登場にもかかわらず、家庭の共有空間では、テレビが主役といえる。子供がテレビの横で寝転がって、やってるゲーム機をのぞいては。ゲーム機のメディア性は微妙である。)

そのため、こうした子供たちは、マクルーハンの目撃した、テレビメディアによって<感覚領域を変容>させられたひとたちとして成長していった。また、家族関係で、外部情報の提供が両親から、(本、マンガもあるが)テレビに移ることもおおかったであろう。居間という共有空間で、外部情報の提供者が、親(とくに父親)からテレビ

に代わってしまうこともおおかったであろう。

マクルーハンにおいては、メデイウム(メディア)をひろくとらえた場合、家などもふくめた。家の構造(とくに居間など共有、私室の占有という機能)というメデイウム、(情報提供、シェルターの提供機能などから)家族関係というメデイウムが、テレビというメデイウムだけでなく、交錯しながら、カギっ子という人種の感性に影響をあたえる、としてよいだろう。

中根氏のタテ社会の意識とは、(マクルーハン、ウオーフとの整合性がある事実だとすると)日本的な、家族関係(言語、家屋構造などもふくむ)というメデイウムによる、一種の感覚変容(というより感覚形成)がもたらした結果だと理解することが(も)可能になる。

現在日本には、タテ社会とことなる傾向要素も一部にあるが、テレビメディアは(テレビメディアとしての感覚変容の影響にくわえて)、旧来の両親にかわる役割の一部を家庭の空間内ではたしており、旧来の家族関係(その一部はタテのしくみ)に修正をくわえつつあるようだ。

カギっ子は1人家にいるときは、家というお城の王様のようにみえる。1人で寂しくはないかしら。さまざまなメデイウムにかしづかれて、お幸せに、と臣民なれば祈るもの。

## 参考文献

1. 中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係』講談社現代新書
2. マクルーハン、マーシャル、森常治訳、1986『ゲーテンベルクの銀河系』みすず書房

## 付 記

テレビメディアの予備的議論、内情についてお教えいただいた仁愛女子短期大学小川英雄先生、また、手話(JSL)の感覚領域についてご示唆いただいた同田中洋一先生にお礼もうしあげます。